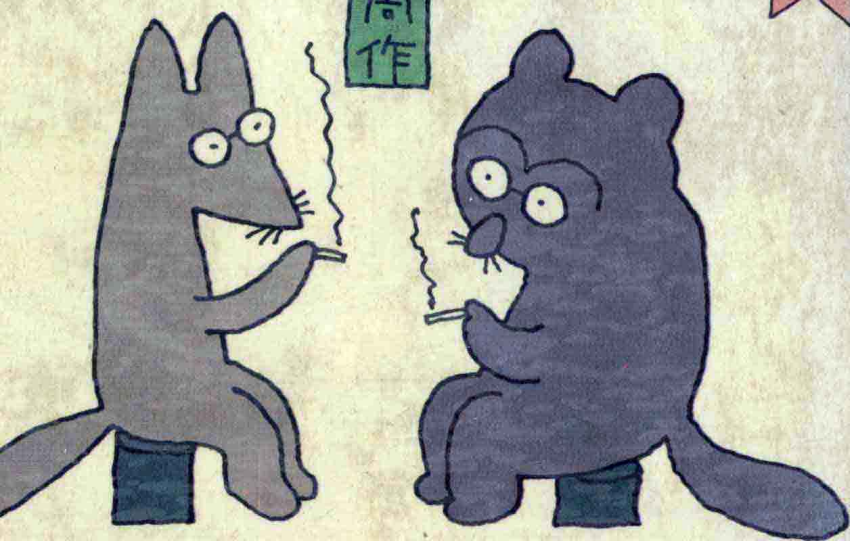


談 急
遠藤周作



下川比呂志

堀内淳子

堀田大作

山桐郎

関宗園

勝山正躬

北杜夫

京塚昌子

佐藤愛子

サトウサンペイ

佐藤寛子

信田修治郎

杉村春子

ゼノ神父

間直之助

丸山明宏

美濃部亮吉

ミヤコ蝶々

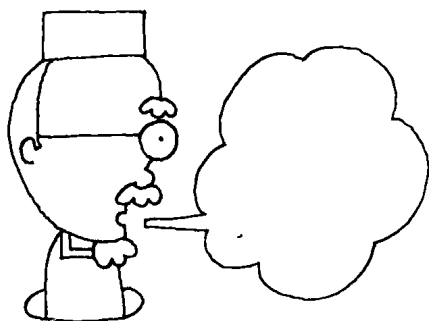
森村桂

山本富士子

ユーモア対談集

急談

遠藤周作



番町書房

怠
談

定価は、カバーとオビ
に表示してあります。

昭和五十年四月十五日 初版発行

検印廃止

著 者 遠 藤 周 作

発行者 村川修二郎

印 刷 松濤印刷株式会社
太陽印刷株式会社

製 本 若林製本株式会社

発行所 番町書房

東京都中央区京橋三ノ五 千一〇四 主婦と生活社内
TEL(五六七)〇三二一(代) 振替東京 一五八四四

© Shusaku Endo, 1975 Printed in Japan

(落丁・乱丁本は、お取替えいたします)

怠

談

目次

ハムレットから創作劇へ

芥川比呂志

7

中年を魅了する下町育ち

池内淳子

21

末法の世に立つ「大説家」

池田大作

37

今こそ映画の栄えるとき

浦山桐郎

51

庭園と名調子で商売繁盛

尾関宗園

65

殴られっ放しの遠藤少年

勝山正躬

79

なせ月は落ちてこないか

北杜夫

93

「かあさん」の純情二重奏

京塚昌子

107

まだ、ひと花咲かせなきや

佐藤愛子

121

マンガをひねり出す辛さ

サトウサンペイ

135

泣かされました新婚時代	佐藤寛子	149
アラ―花子よくなったか	信田修治郎	165
一筋に生きる「女の一生」	杉村春子	179
酒飲ムノ人天国ユケナイ	ゼノ神父	193
小粒になってきたボス猿	間直之助	207
ああ天草四郎と豆ダヌキ	丸山明宏	221
ギャンブルは公の仕事か	美濃部亮吉	235
夫婦の味はホント微妙や	ミヤコ蝶々	249
夢とファイトさえあれば	森村桂	263
日本一の美女といわれて	山本富士子	277

装幀 和田 誠

カット 秋野卓美

怠

談

芥川比呂志

ハムレットから創作劇へ

あくたがわ ひろし 演出家・俳優

大正9年、作家龍之介の長男として生れる。昭和17年慶大仏文卒、軍隊生活を送り、終戦のとき中尉。戦後加藤道夫氏らと「麦の会」を結成。22年久保菜の「林檎園日記」に出演、23年文学座入り。31年「ハムレット」の演技などで岸田賞受賞。38年文学座を脱退、劇団「雲」に参加。この間、闘病生活を数度経験。



芥川さんはいうまでもなく、芥川龍之助の息子である。そして、私にとって
は、同じ大学の同じ科の先輩である。彼はまた私の、病気の先輩でもあった。
八年前、私は芥川さんと共に慶応病院で同じ時期に入院し、同じような大手術
をうけ、死線をさまよった。その時、彼は、病床の私に、回復したら戯曲を書
け、自分が必ず演出してやると言ってくれた。そして、その言葉通り、私は戯
曲を二つ書いた。「薔薇の館」がその一つである。芥川さんは、その演出だけ
でなく、出演まで引きうけてくれた。

周作 おとうさまのお話から始めましょうか。

芥川 ハイハイ。あなたの誘導にしています。

周作 芥川龍之介先生のこととは、どのくらいおぼえていらっしゃいますか。

芥川 ぜんぜん、わからなかった。死んだ時、ぼくは八つだったけど、第一、悲しくなかった。
おとなが子どもを抱きしめて泣いたりするから、こっちも悲しくなったりしてね。だから、あん
まり感情移入しなかったな。

周作 お亡くなりになる前は、あんまり接触されなかったんですか。

芥川 ええ。ほとんど二階の書斎で書いて、その間、二階へあがっちゃいけないことになっ
てたんです。ときどきは遊んでくれましたけどね。

周作 なにか一緒に海水浴をして、肩車で海の中へはいってするような写真を拝見したけれども。

芥川 ええ、夏はね、鵜沼ういぬまの海で海水浴しました。あれはやっぱり明治の人なんですね。すごい教え方をするんだ。

水虫の如き父の影響

周作 勉強のほうでも？

芥川 いや、水泳。肩車してジャブジャブ、自分の肩までくらい、はいって行ってね、いきなり子どもをほうりだすんです。こっちは浮きつ沈みつ、もがくわけだ。ギャアギャア泣きわめいてると、かつぎ上げて砂浜へもってきて、アブるんですよ。そうしてまた海へはいって行ってボチャーンとほうりこまれる。そのおかげで、ぼくは水泳をおぼえなかったね。

周作 ぼくがゴルフを習ったのと同じですな。柴田錬三郎氏にあまりに低能よばわりされたために、一時間でやめてしもうて、爾来、ゴルフなんかするやつが憎うてしょうがない（笑う）。おとうさまは、こわかったんですか。

芥川 あんまり怒られた記憶はないんですね。

周作 でも、おとうさまが小説家だということは、知っていらしたでしょう？

芥川 まあ、死んでからですね。死んで全集が出始めたでしょ。それをぼくは読みましたよ、ずいぶん。

周作 それは、いつ？

芥川 小学校の時。死んだときが二年生で、それから間もなく。あの時分は総ルビつきだから読めたんです。あの時分も国語の問題があって、ぼくのおやじは改革反対論でね、総ルビ方式賛成論者。だから全集は総ルビなんです。小学校二、三年でも読めたんです、わかってもらわなくても。

周作 うちのチビが、小学校四年くらいから芥川龍之介全集を読みだして、今年の夏休みの宿題に、芥川龍之介論ちゅうのを書いとった。「杜子春」とか、ああいうものは子どもが読んでも面白いですからね。

芥川 ぼっちゃんも、龍之介という名前でしょう？

周作 ぼくが芥川賞をもらったときに生れたから、おとうさまのお名前をいただいたんです。

芥川 ぼくはお宅へ伺うと、うなされるような気分になるな。あなたが遠慮されるみたいになんて「龍ちゃん」なんて呼ばれるとね。これがまた、うちの年寄りたちが父をよんでた呼び方なんです。それを聞くと、ぼくはまだ生れてないような気分になってね。（笑う）

童話っていえば、ぼくがカゼひきで熱出して寝たときに、できたての童話を読んでくれたことがありますよ。原稿ができて雑誌社に渡す前に、自分で声を出して読んで確かめてみる、というつもりもあったかも知れませんが、まくらもとにすわりこんで読んでもらったことがあるんです。

周作 吉行淳之介の父親がやっぱり小説家だし、北杜夫は歌人斎藤茂吉の子でしょう。おやじ

が文学者で、自分も同じような仕事をしている。そのことを吹っきるまでに、だいぶ年数がかかるらしいですね。北君なんか、まだ吹っきれてないようです。吉行君は、三、四年前に「砂の上の植物群」を書いて、やっと吹っきれた感じをもった、といってましたけれども。かなり長い間、芥川さんのなかにおとうさまは生きていた感じですか。

芥川 そうですね。かなり長いです。芝居の仕事を始めて、ジャンルがちがうし、これでいいんだと思つてると、また言われるんだよね。

周作 ハムレットの父親のごとく現われるわけだな。

芥川 とうか、水虫のようにといいかね、なかなか、なおらんもんです。

周作 いまは吹ききったとうか、距離をおいて見るができますか？

芥川 ええ、やや、だな。

周作 おとうさまが小説家だから、文学はやりたくない、演劇のほうがいい、ということですか。

芥川 いや、それはないの。気が多いんですよ、ぼくは。絵もかいてみたいし、建築みたいなこともしてみたいし、文学青年でもあったし、芝居も好きだしね。自分を制限しないで、いろんなことをやっていくには、芝居がいちばんいいような気がしたんですよ。ちょっとキザだけど。

役者志望でなかった

周作 大学のころ、詩を書いていらしたでしょう。

芥川 ええ。中学時代は戯曲を書いたりしてたんです。

周作 じゃ、芝居は子どものころからお好きでしたか。

芥川 好きというよりも、じいさん、ばあさんのお供で、歌舞伎は子どものころから見えました。それでね、中学生時代、学芸会なんかでいろいろやりましたよ。

周作 自分で役者になって？

芥川 「ベニスの商人」のシャイロックになったりね。それから中学校は男ばかりでしょ、女優の出ないものをさがそうと思って、神田の古本屋へ行って近代劇全集を買ってきて読みましたね。

周作 それで大学時代に、加藤道夫さんとか堀田善衛さんと演劇活動を……。

芥川 新演劇研究会ね。堀田君はまだメンバーじゃなかった。

周作 「商船テナシチ」で最後に堀田さんが出たとか。

芥川 そう。一度コツキリ。

周作 そのとき、俳優でいらっしやいましたか？

芥川 俳優兼演出家でした。

周作 そのときはもう俳優になる考えが固まってましたか。

芥川 いやいや、戦争が終ってからですね、固まったのは。昭和十七年の九月に卒業して、十月一日に入営して、まあ幸いにして敗戦まで内地にいたんですけどね、復員して戦後のゴタゴタのときは、家庭教師をしたりして糊口をしのいで……。

周作 それから文学座へおはいりになって？

芥川 役者になる気はサラサラなかったけど、芝居の世界で自分にできそうなことがあるような気はしたんです。昭和二十三年でしたかね、文学座に研究所ができて、岸田国士先生がやりたまえって。ぼくは望むところだと思ってはいったわけてすよ。それでジャン・アヌイをやれというので、「アンチゴヌ」を訳して、演出して、役者として出たんです。それが最初です。

周作 役者としての基礎訓練は、それまでにおやりになったんですか。

芥川 基礎訓練というのはなかったですね。しいていえば軍隊生活かも知れない。

周作 はあ？

芥川 というのは、ぼくは学生時代に岸田先生のお書きになるものは、ずいぶん読んでいたんです。先生の演劇評論の中に、日本の俳優は声に魅力がない。外国の俳優は、言葉の意味はわからなくても、声を聞いているだけでウットリする。それが役者の基本的条件だ。そういう役者が日本には少ない。日本人では号令で鍛えた軍人の声に男として魅力がある、というような論文があったんです。

それで軍隊へいったでしょ。軍隊生活って、あんなに歌をうたうところってないですね。前橋の予備士官学校にいた十カ月というものは、毎日、歌をうたい、号令調整をやった。赤城山に向って「全隊、とまれーッ」て怒鳴る。こいつは発声訓練になると思ったわけだ。ひじょうに一生懸命やりましたよ。その結果、日本の芸道の話にあるでしょ、義太夫の人が浜辺でノドから血

が出るまで唸^{うな}ったなんていうのが。

周作 ああ、ある、ある。

芥川 あんなの、なんでもない。血なんか、すぐ出ちゃう。(笑う)

思い出深い「どん底」

周作 落語の談志が修業時代に、多摩川の川原で風に向って発声練習をしたと話しとったけど、日本の芸道にはそういう法則があるのかな。あなたの場合は、それが後に舞台の発声の訓練になったわけですか。

芥川 大きい声をハッキリ出せるようにはなりましたね。そういう意味じゃ、正規の基礎訓練なんて、やってないにもひとしいですね、ぼくは。ただ器械体操が好きだった。中学が高師の付属でしょ、体育科があるんです。藤下りとか大車輪とか好きだったな。それがあとでずいぶん……。

周作 俳優に必要なのは運動神経だ、ちゅうからね。

芥川 運動神経と言葉に対する感覚。しゃべる技術。それが大切でしょう。

周作 まったく運動神経のないやつでも名優ちゅうの、ありますか。

芥川 まあ、ないでしょうね。

周作 それじゃ、ぼくは役者になれん男だ(笑う)。芥川さんがご病氣後、初めて舞台にお立ちになったとき、ホンのちょっとした出^で場^ばだったけれども……。